

最新鋭スキー技法の具現者たち

栄冠を求めて

連載第3回——写真・文 志賀仁郎

現在、日本のゲレンデで、一般のスキーヤーたちにもっとも愛され、もっとも目標とする技法として考えられている技術ウエーデルンとは、どのように誕生したのか。上体をフォールラインに向けて静止させ、下肢を振り出すようにしてすべるこの技法は基礎スキーのメソッドとして、どのように位置づけられるのか。ウエーデルンの誕生から日本での発展までを振り返る。

「ウエーデルン」という言葉ほど、世界中のスキーヤーを沸き立たせた言葉はない。そしてウエーデルンと呼ばれる技法ほど日本のスキーヤーを夢中にさせる技術はない。日本では、スキーをするすべての人たちが、この技術の習得、完成に骨身を削っている。日本ではもちろん、気楽に行けるようになったカナダのウイスキーの広々としたコースの中で、日本人スキーヤーたちが一様にウエーデルンに励んでいる姿は異常な見世物といっている。

「何であんな広い緩斜面で、あんな奇妙なダンスをやっているのか、もつとのびのびすべればいいのに」というのがヨーロッパやカナダのスキーヤーから、研究に明け暮れていたステファン・クルツケンハウザー教授が、オーストリアナショナルチームのエースたちのすべりの中に見えた共通項を探っていた。オテマール・シュナイダー、クリスチャン・ブラウダ、そして若いトニー・スビース、さらに当時中央ヨーロッパのエースたちを圧倒していたノルウェーのスーパーエース、スタイン・エリクセン、遠い東洋の雪の上に育った天才児猪谷千春らのすべりが、高速分解カメラにとらえられていた。

「ウエーデルンが完成された時、それができるスキーヤーは、サン・クリストフの教官の中のわずか数人しかいなかった。」クルツケンハウザー教授はそう語っている。クルツケンハウザー教授が上げた何人かの中には、日本にも来たことのあるフランツ・フルトナー、ルディ・マツトラがいた。

1953年、第2回インタースキーがスイスのダボスで開催されたが、その時オーストリアは、サン・クリストフの新しい主張を発表した。その主張は、その当時世界のスキー界に浸透していたフランスのメソッドとは際立った対立を見せた。



1956年、コルチナ・ダンペッツォでのオリンピックで、トニー・ザイラーは史上はじめて三冠王となり、世界中を熱狂させた。

タの人々の日本人スキーヤーに対する感想なのである。

日本人にとつての至高の技術、ウエーデルンについて考えてみよう。

ウエーデルンという技法の誕生

ウエーデルンという技術が生まれ、その言葉が、スキー先進国の人々の口の上るようになったのは、約40年程前のことだ。オーストリアのサン・クリストフで、スキ

リターンが要求されるストレートフラッシュエの中での上体の正面への静止と下肢の左右への振り出しといった要素であった。深まわりターンには外向傾の姿勢をとる。連続小まわりターンでは上体を正面に静止させて下肢を左右に振り出してすべるという要素が抽出された。連続小まわりターンは極めて難度の高い技術であった。

世界のトップレーサーのわずかな何人かができるスーパーテクニク、そしてサン・クリストフの名手たちの何人かによって完成された超難度の技術は、ウエーデルンと呼ばれる

夢のテクニクの日本への伝播

インタースキーの場で期待した評価を得られなかったオーストリアテクニクだったが、ウエーデルンは、秘かなブームをこのダボスで生んでいた。インタースキーに参加した各国のエキスパートスキーヤーたちが、それぞれのホームゲレンデに帰って、ダボスでのイメージを再現するトレーニングに励むことになった。インタースキーの場で否定されたオーストリアスキーだったが、夢のテクニク、ウエーデルンだけが独り歩きを始めていた。

ウエーデルン、その言葉だけが、世界中のスキー国に伝わって行った。

日本にその技術に関する情報が伝えられたのは54年であった。

その54年スウェーデンのオーレで開かれたアルペンスキー世界選手権大会に参加した、斎藤貞、茂原博太郎選手たちの帰国報告の中に、レース前にトレーニングしたサンアントンで凍結した急斜面を、すべり降りるオーストリアチームのテクニクを報告している。

「われわれが斜滑降、キックターンで怖るおそるすべり降りるような、すごい斜面を、オーストリアの連中は、スキーを左右に振るようにフオールラインをまっすぐにすべり降りて行った。」

そのふたりの日本のトップレーサーを驚かせた技法がウエーデルンだったのである。

56年、オーストリアは、スーパーエース、トニー・ザイラーをコルチナ・オリンピックの三冠王に持つて、その技法の優位を誇るようになった。

コルチナはオーストリアの主張する、外向傾の技法の優位、ウエーデルンの効果を証明する大会となった。

57年春、三冠王トニー・ザイラーが突然、来日した。

コルチナ三冠王トニー・ザイラーと、57年シーズンそのザイラーより多くの勝利を積み上げたヨセフ・リッター、ふたりの来日は日本のスキー界を狂喜させた。

春の残雪が残る石打スキー場で行なわれた、全日本ナショナルチームとの練習合宿での、ふたりのスキーは、あまりにも鮮烈であった。当時、日本のアルペン競技をリードしていた、オーレのコーチ野崎彌さんは、トニーの技法はウエーデルンという技法だと解説している。

ウエーデルンという言葉がトニー・ザイラーの鮮烈なイメージと重ね合わされて、日本のスキーヤーの頭の中にインプットされた。トニー・ザイラーが来日した、その年の秋ルッケンハウザー教授が心血を注いで完成させた『オーストリアスキー教程』が日本で福

岡孝行さんによって翻訳発行された。美しい写真、正確な分解写真を多用した、オーストリア教程は、日本のスキー界に大きなブームを巻き起こすことになった。

次のシーズン、ウエーデルンを完璧に身につけたオーストリアスキーの重鎮、ルディ・マツトが来日した。

オールベルグスキー学校の校長であり、ルッケンハウザー教授の片腕として、新しいオーストリアメソッドを完成させた名教師、ルディ・マツトは、当時既に50歳に近い年齢に達していたはずだが、そのバネのきいた見事なすべりに日本のスキーエリートたちは舌を巻いたのである。

それまで、フランススキーをもっとも新しいスキー技法として受け入れていた、日本のスキー界に、オーストリア・スキーへの回帰現象が始まっていた。

一般のテクニクとしてのウエーデルン

2年続けてのマツト氏の来日、そして『オーストリアスキー教程』販売成績の上昇は、日本のスキー界にオーストリア一辺倒の流れを生み出していた。

59年に発行された全日本スキー連盟スキーテキストはオーストリア教程をそのまま借りたものとなった。もちろん、そのSAJ教程の最終頁には「ウエーデルン」が載っていた。

53年に生まれたウエーデルンは当初、わずか数人の名手しかできない超難度の技法だったと紹介したが、クルッケンハウザー教授は、その技法が、55年の教程の発刊当時10数人の名手たちによって演じられるようになり、50年代の終わりには少なくともオーストリアに数100人のウエーデルンができるスキーヤーが生れていたと語り、さらに60年代には一気に世界中に普及して、「こんな難かしい技術が一般のスキーヤーに浸透するはずはない」とした、世界のスキー指導者の予言をくつがえしてしまった。



「オーストリア・スキー教程」(1972年小社刊)のウエーデルン指導法にはショートスキーと開脚姿勢を補助とする習得法が紹介されている



踏み換えによるウエーデルン。左右のスキーへの荷重移動を自然に行ない、左右の脚の運動を同調させる。(全日本スキー連盟編「スキー教程」P-115より)

60年代は、世界中のスキーヤーがウエーデルンの習得に明け暮れた10年間であった。とくに日本では、ウエーデルンを至高の技術とする信仰が深まっていた。

日本人で初めてこの技法を身につけた名手はルディ・マットの講習会のアシスタントを務めた笹川雄一郎であった。

アルペン競技のトップレーサーであった笹川は、福岡教授の熱心な誘いに応じて、マツト氏の助手となり、2シーズンを彼とともに過して、完璧なオーストリア技法を身につけていった。

60年、朝日新聞、NHKというふたつの巨大マスメディアの後援で、オーストリアからフランツ・デリブルがふたりのスキー教師とともに来日、蔵王で、オーストリアスキー教室が開かれた。

初心者を含めた一般のスキーヤーを対象としたこの講習会は、爆発的な人気を集めた。3人のオーストリア教師のウエーデルンは華麗であった。その講習会の助手を務めた若い日本人教師の中から福山和男ら何人かのウエーデルンの名手が生まれていた。

63年、クルッケンハウザー教授が3人の名手を伴って日本を訪れ、各地でオーストリアスキーの研修会が開かれた。

この講習会には、日本中のスキーのうまい指導員たちが参加し、その技術の習得に熱中した。中でもこの講習会にアシスタントとして選ばれた若いスキーヤーたちの上達は目を見張らせるものであった。

オーストリア技法を身につけ、ウエーデルンのできるエキスパートとなった若者たちの中から5人が選出され、65年の第7回バドガスタイン・インタースキーに送られた。

ウエーデルンを完璧に身につけた5人であった。平沢文雄、丸山庄司、宮沢英雄、北沢宏明、斉藤城樹である。

その当時のウエーデルンは、上体をフォールラインに正対させ下肢を左右に振り出し、スキーのテールを外側に強く押し出す、という技法であり、いかにテールを大きくスラセるかが競われていたとも見えた。

64年、オーストリア国家検定教師の資格を取得して帰国した杉山進のウエーデルンは、正確にその技法のポイントを見せていた。正確な上に、流麗、その技法は、日本人が到達し得た最高のものといえよう。

私の撮影した杉山進のウエーデルンの写真がその当時のこの技法のすべてを見せてくれている。

インタースキーに派遣するデモンストレーターを選び出すデモ選は、64年を第一回として毎年開かれ、それは日本でいけばんスキーのうまい男を決める競技会へと進化してきたのだが、このデモ選を目標とした若者たちの努力が日本のスキーの技術水準を一気に高めることになった。

ウエーデルンを完璧にこなせるスキーヤーたちは一気増加しているのである。

日本中のスキー場がウエーデルンの練習場となった。ウエーデルンのできるスキーヤーの数は、この時代に急増している。

ウエーデルンが、上級者の勲章となった。

本場をしのぐ日本の完成度

65年、オーストリア・バドガスタインの第7回インタースキーは、オーストリアかフランスかで争われてきた技術論争が終わりを迎えオーストリアのバインシュピールテクニクがもつとも優れた技法であり指導理論であると認められた大会となった。

参加22カ国のすべての指導者たちがウエーデルンを身につけていた。

この第7回インタースキーに初めて公式参加した日本は5人の若きデモンストレーターによって、日本で行なわれているスキー技法を演じて見せたが、それは完璧なオーストリア技法であった。

オーストリアの新聞に「日本から来たクルツケンハウザーの孫たちは、オーストリアのスキーを完璧にしかもオーストリアの教師よりも優美に演じてみせた」と評価された。



深い弧のウエーデルンでは、スキーのまわしこみと荷重移動時の角付けの切り換えが大切
（『日本スキー教程』P-117より）



膝を中心とした下肢への意識を集中し、スキーを操作する浅い弧のウエーデルン。（『日本スキー教程』P-116より）

その評価はオーストリア技法以外にスキー技法はあり得ないとしてきたSAJの人々にとって最大の讃辞であった。

しかし、この65年当時、オーストリア国内からも世界のスキー国の中にも、オーストリア教程への批判が高まっていたのである。

自説を主張するため、あまりにも誇張された外向傾のフォーム、さらにシユテムターンを洗練させればパラレルターンになるとした主張が、批判にさらされていた。

新たな発想の スキー技法

67年シーズン、再びクルツケンハウザー教授が3人の名手を連れて来日した。

オーストリアはこの時、内外からの批判をかわず解答を世界にさきかけて日本に送り届けたのである。

シユテムから導入しない、大きな立ち上がり沈み込みを使ったパラレルターン、ムルメルシユピング、そして、やや短いショートスキーを使って、両足を開いたフォームから左右へ小まわりのターンを繰り返すワウワウシユピング、といった目新しい技法や練習法が公開された。

シユテムからパラレルは生まれえないとしたシユテムのギャップと呼ばれた批判をこのふたつの技法、指導法はクリアしていた。

この講習会は、一級、准指以上を対象とする研修会として日本各地で開催され、当時の日本の上級スキーヤーたちのほとんどが参加している。

ワウワウシユピング、この犬が吠える声からイメージされた、開脚のウエーデルン指導法は、ウエーデルン指導に新しい可能性を切り開いた。

次の年、68年アメリカ・アスペンで開かれた第8回インタースキーでは、オーストリアは、それまで、スキーのバイブルとまで呼ばれていた55年教程に変わるまったく新しい指導法を提唱、フランスも従来のパラレル、ロ

ーションへのこだわりを捨てて、2国の和解が成立した。

この大会には、それまでの大会にない新たな技法が提案された。ナシヨナルデモ参加国のすべてが、より速いより切れるターンをデモンストレーションしたのである。

フランス、ドイツ、オーストリアの若いデモンストレーターたちのスキーは、すさまじい迫力で、会場を圧倒した。ウエーデルンは切れと走りの戦術的なムードの技法となった。日本は、このインタースキーに日本独自の指導理論という「立ち開きからの発想」と名付けられた指導法を展開して見せた。

それは、クルツケンハウザー教授らが残していたワウワウシユピングの考え方を基本的にアレンジしたものと言っている。

ブルークボーゲンリズムを速めて左右へ繰り返し、徐々に開脚ウエーデルンに近づけ最終的には、ウエーデルンを完成させる、という指導理論であった。

その理論の基礎にあったのは、日本のスキー場の狭さから発想であった。日本のスキー場は、左右への幅がなく縦方向に長いという特徴がある。日本人にスキーを教える場合には、その特異な地理的条件を考慮しなければならぬ。ウエーデルンを先に教えることが必要なのだ、とする考え方なのである。

ウエーデルンこそスキーヤーの目指すものとするウエーデルン信仰がここにはつきりと示されていると言えるだろう。

この理論を生み出した中心人物は、64年シーズンオーストリアに留学し、オーストリアスキーを「これ以外にスキーはない」とした大熊勝朗理事であり、バドガスタインの5人組の平沢文雄であった。

ズレやすい短か目の柔らかいスキーを使っているウエーデルン練習、それが日本のスキーの新しい方向になろうとしていた。

ブライト(開脚)ショートスキーがウエーデルンへの近道とし、ウエーデルンは上級者の特権から中級者までの到達目標となった。ウエーデルンは誰でもできる、という状況が生まれる土壌がこの時生まれている。

杉山進がオーストリアからもちかえった完成された見事なウエーデルン。「杉山進のトップ・スキー」(小社刊より)

